

＜株式会社エフエム東京 第475回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和3年2月度

2. ※新型コロナウイルス感染防止のため、ご参集頂かず、素材の郵送またはメール送付・レポート提出対応といたしました。

3. 委員の出席：委員総数6名（社外6名 社内0名）

◇レポート提出委員（4名）

内 館 牧 子 委員
佐々木 俊尚 委員

秋 元 康 委員
松 田 紀 子 委員

◇レポート未提出委員（2名）

ロバート キャンベル 委員長

川 上 未 映 子 委員

◇社側確認者（レポート確認者）（8名）

黒 坂 代表取締役社長

西 川 取締役副社長

小 川 常務取締役

内 藤 執行役員編成制作局長

延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー

宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長

若 杉 編成制作局制作部長

山 領 編成制作局編成部プロデューサー

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約27分）

【番組名】『山崎怜奈の誰かに話したかったこと。』月曜～木曜 13:00～14:55

【放送日時】1月18日（月）25:00～26:00 放送のダイジェスト 約27分

【番組概要】

今回ご視聴いただくのは、2020年秋の改編で10月からスタートした『山崎怜奈の誰かに話しかったこと。』の1月18日（月）放送のダイジェストです。この番組のパーソナリティは、23歳、社会人でいえば1年目となる乃木坂46の山崎怜奈。自分自身の悩みや疑問を素直に吐露し、リスナーの皆さんからはさまざまなことを学び、育てていただくというスタンスで番組に臨んでいます。日々の生活の中で感じる「モヤモヤ」をリスナーから募集し、一緒に考えることでひとつの答えを出していく“スピークアップ”では、価値観や消費行動が注目を集める”Z世代”として、当事者の声を届けています。

番組がスタートして4か月弱が経過しますが、ラジオ局の垣根を超え、他局で人気番組を持つパーソナリティがゲスト出演したり、真裏の番組と生放送中に電話を繋ぐなど、もともとラジオが大好きで、常時チェックしている番組の数は20~30という山崎怜奈の個性を活かした、これまでにない演出も数多く実施され、ラジオ界に新しい話題を喚起してきました。

お聴きいただく1月18日（月）の放送では、スピークアップのテーマに「ジェンダーにまつわるモヤモヤ、感じたことありますか？」を設定。ゲストには、自虐やセクハラをネタにしたお笑いとの向き合い方、差別やジェンダーなどの社会問題に対する思いをつづったエッセイ本『本音の置き場所』が話題を呼んでいる、フォーリンラブのバービーを迎え、現役アイドルがジェンダーについて感じるモヤモヤについてリスナーと本音で語りました。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○ジェンダーの問題は最近ますます厄介になり、「ラディカル・フェミニズム」と言われるような分断を煽る過激な言説も現れてきている。その一方で、世代交代とともにリベラルな価値観は日本社会全体に浸透し、若い世代では自然に価値観の多様性を受け入れられるようになってきているという指摘もされている。『山崎怜奈の誰かに話したかったこと。』を拝聴し、そういう新しい世代のジェンダー観に触れた感覚があり、非常に爽やかで素直な物言いにたいへん好感を抱いた。女性の問題だけでなく、「男らしさの呪縛」というところを取り上げたのも非常に良かったと感じる。リスナーからの、22歳の男性が大学でジェンダーの研究を行っている話や、19歳の男性がレディースの服を買っているという話なども、たいへん共鳴した。山崎氏のトークで、「男らしさ」「女らしさ」なんてものはや不要で、自分らしさだけがあればいいという指摘はそのとおりだと思う。「人に対する『らしい』もそうだけど、自分に対しても『男らしさ』『女らしさ』というのは呪縛になる。自分らしくあればいい」という言葉は、ジェンダーも含めた価値観の多様性が当たり前になった時代のひとつの到達点として、特筆すべき表現だと思う。アメリカ大統領選が象徴的だが、あらゆるものが分断され、世界が党派的なものに飲み込まれていくような社会状況で、日本ではそこまで大きな分断が進まず、穏健で良識的なジェンダー観が37歳のバービー氏と23歳の山崎玲奈氏のあいだで交わされ、それがラジオで放送されているということは、現在の日本社会の健全さを現しているのではとしみじみと思った。

○半径2メートルの世間や世の中のことを取り上げる、というキャッチフレーズがとてもいいと思う。等身大の方向性が的確に表れていますし、山崎怜奈氏の立ち位置もわかりやすい。今回のテーマはジェンダーについて。このテーマはうっかり扱ったりやけどを負いやすい。ひとくくりに男女の「らしさ」を個人的な意見で述べるのと、思わぬ方向から矢が飛んでくる。そのくらい根の深い、「わかるひとにはわかるけど、わからない人には1ミリもわからない」世界の話。多様性が当たり前になっている風の時代を生きる我々としては、「らしさ」は性や人種に縛られるものではなく、その人本人の価値観によるものだと思うが、メディアは相変わらず「らしさ」、あるいは「らしさから外れたはみだしもの」をテーマに扱うことが多く、それによるじわつとした洗脳が今の子供たちにも脈々となされていることを、メディア側は自覚をもったほうがいいと考える。バービー氏はそういう意味では絶妙な立ち位置の話者だったとは

思うが、結局は「価値観を前面に顔出して生きよう」というまっとうなメッセージで、それはとても当たり前の話で何の発見もない「だよね〜」で終わってしまう回答。「らしさ」を押し付けられるときの身のかかし方や気分の切り替え方、二度と相手にそう言わせない決まり文句などを具体的に教えてほしいのでは。このラジオを聴いているリスナーの女性が「明日から使える」というフレーズや、ぐっと深堀したものが聞きたかった。山崎怜奈氏も、そういう意味ではアイドルという「女性らしさ 若さ かわいらしさ」を売りにしている立ち位置なので、彼女のことばがどれだけリスナーに響いたのか、怪しいと思う。生まれつきかわいい人は、不細工に生まれた人間の気持ちは到底わからない。この視点のずれが、気になった。

○個人的には、「だからどうしたうるせえ黙れ」みたいなタイトルで、百戦錬磨の女性が、自分の美醜に関してや、あらゆるからかいやバッシング、男たちからのひどい品定めに関して、セキララに爆笑しながら話す、というような番組のほうが面白いと思う。友近氏とか、ぼる塾などでしょうか。ネタにすることで逞しくなっていく女性の姿は、同じような目にあっている女性に勇気を与えられると思う。

○パーソナリティーの山崎怜奈氏の話は聴きやすい。滑舌がよく、声もいい。しっかり予習してから番組に臨んでいるからゲストに対しても、テーマに対しても曖昧な相槌で終始することなく、自分の意見をきちんと言えるのだろう。本当にラジオが好きだというのが伝わってくるし、自分の言葉を大切にしている。ただ、あまりにも完璧なのはどうなのだろうと思ってしまう。20年前のラジオ番組とあまり変わっていない気さえしてしまうし、ラジオの限界も感じる。最近話題になった音声 SNS の Clubhouse の方が、クオリティに関わらず、何が起きるか分からない、予定調和ではない面白さがある。一時の流行ですぐに飽きられてしまうものかもしれないが。そういう意味では、この番組は優等生的というか、疲れずに安心して聴き流せるから長く続くのかもしれない。

○この番組は山崎怜奈氏がいればこそ成立する番組だと思われた。山崎氏の声、話し方は甲高く騒ぐ女性と全く違い、とても利口な人という印象を受けた。ゲストのバービー氏とのやり取りも良かった。バービー氏にははっきりとした意見があったが、山崎氏がそれをとてもうまく活かし番組を進めていた。ジェンダーの問題は東京五輪の森前会長のコメントで再び注目を集めたが、これは実に難しい問題。リスナーからの「同性かららしさを求められる」という

声はとても貴重な視点で、ここをもっと掘り下げられたら良かった。そういった声を丁寧に拾って扱うことはリスナーと平等に、対等に語る、という番組コンセプトとも合うのではないか。